

プロローグ

「改めて家族を考える」



東京大学名誉教授
原島 博

■「家族」というテーマは非常に難しい

この3回シリーズのシンポジウムコーディネーターをしております原島でございます。まずは、こんなに多くの方々にお集まりいただきまして、御礼を申し上げます。最初に、プロローグという形で話をさせていただきます。

このシンポジウムは2016年に始まり、今回で3回目になります。全体のテーマは「これからの家族を考える」。これについては5年くらい前から事務局と一緒に考えてきましたが、花王は家族を大切にしているというイメージが非常に強い会社ではないかということで、このテーマにいたしました。

ところが、このテーマを設定した後、実はかなり悩みました。若干、反省もしました。なにしろ難しいテーマです。おそらくみなさんの家族というものに対するイメージはそれぞれ違うのではないのでしょうか。年代によっても違うでしょうし、男性から見た家族、女性から見た家族も違うのではないかと思います。

このシンポジウムを企画したとき、なぜ難しいのかと思い、いろいろな方に聞いて回ったところ、2つの意見に分かれました。ひとつは、「家族は自分にとってしがらみである」。考えてみれば、その通りですね。自分がどの家族に生まれるかは選べません。結婚相手は選べても、選んでしまったら、普通はそう簡単には別れられません。すると、しがらみになってしまう。一方で、「やっぱり一人では寂しい、一人では生きていけない、絆は大切だ」という意見もありました。家族はしがらみであるし、絆であるという意見にはっきり分かれたことから、1回目は、「しがらみときずな」というタイトルにいたしました。

そこでは、『岸辺のアルバム』など、いろいろな家族をテーマにしたドラマを作っておられ

る脚本家・小説家の山田太一先生に、「宿命としての家族」という演題でお話しいただきました。人は、それぞれ違います。人がそれぞれ違っていいように、家族も違っていいのではないかと。理想の家族というものは実在しないのではないかと。家族の中で、それぞれの生き方が問われているのではないかと。家族は絆だと言われていますが、単なる依存関係では成り立たないのではないかと。そういうお話だったと思います。特に山田先生は、歳を取ると自立することが大切なのだと、かなり強調しておられました。

理想的な家族は実在しないとはいえ、家族は最大の関心事です。その家族はいつからあるのだろう、家族のルーツにさかのぼって考えてみようと思ひ、2回目のタイトルを「進化しているのか家族」といたしました。そして、京都大学総長で、ゴリラの専門家である山極寿一先生に、「人間家族の由来と未来—ゴリラからAIまで」という演題でお話しいただきました。

山極先生が最初に、家族は人間社会だけの営みだとおっしゃったのには驚きました。よく、おしどり夫婦などと言いますので、おしどりに家族はあるのかと思っていましたが、単に子育てをするだけでなく、死ぬまで一緒にいるのは人間だけだそうです。では、なぜ人間には家族があるのか。人類はアフリカのサバンナという猛獣に襲われる危険があり食物も簡単に手に入らない厳しい環境で、互いに助け合うという戦略によって生き延びてきました。子育てに関しては、チンパンジーやオランウータンの母親が子どもに5年から7年くらい乳を与え続けるのに対し、人間は1年で離乳します。それは厳しい環境の中でたくさん子どもを産む必要があるためですが、子どもが育っていないのに離乳できるのは、子育てを母親だけがするのではなく、まわりと助け合う仕組みがあるからです。それが人間の重要なところなのですが、今は、子育てが母親だけのものになってしまいました。父親はなかなか家に帰ってこず、隣の家は全然知らない人。保育園まかせで、互いの助け合いがなくなってしまった。現在はインターネット社会ですが、ネットでは助け合うことはなかなかできません。助け合うためには「共感力」が必要で、共感力は、いちばん基本となる最小単位の家族で育まれるというお話でした。

■イメージを変え続ける家族

3回目のタイトルは「かわる家族かわらぬ家族」ですが、正直に言うと、今日は結論が出るとは思っていません。むしろ、自分の問題としてみんなで考えていくためのヒントが得られればいいと思っております。思うに、わたしたちは家族を、「こういうものでなければいけない」と、かなり固定的に考えてきたのかもしれない。戦前の家族には、大家族で、家父長という威張っている人がいて、女性は厳しい環境に置かれてい



たというイメージがあります。それが戦後は、ほとんど核家族になりました。家には父親と母親と子どもだけかいて、おじいちゃんやおばあちゃんは田舎にいるような家族です。父親の帰りは遅く、残された母親が子育ての役割を負わされているイメージですね。こういう家族を、社会学では「近代家族」と呼ぶらしいです。

今は、こうしたイメージがさらに変わってきていますが、家族というのは歴史的に見ると、実はもっと自由だったのではないのでしょうか。かといって、ゴリラまでさかのぼるのは行きすぎのような気もしますので、戦前よりもずっと前、たとえば江戸時代の家族はどうだったのかを考えてみようと思いました。そこで、ぼくが尊敬している田中優子先生、現在は法政大学の総長として、きわめて多忙なお身体でいらっしゃいますが、ぜひにとお願いいたしました。演題は「家から連へ」。「連」という言葉を初めてお聞きになる方もいらっしゃると思いますが、今日は家に帰ったら、江戸時代には「連」という素晴らしいものがあつたということ、まわりの方に伝えていただければと思います。では田中先生、どうぞよろしく願いいたします。

